

# なぜ和歌を絵画化するのか ——読む力がつく教え方・学び方——

松原一義\*

## The Reason why Waka is Pictorialized The Way to Teach and to Learn How to Read

Kazuyoshi MATSUBARA

### 要旨

日本古来の文学である古典は、日本人の精神生活の根であり、それが枯渇することは、日本人の伝統的な精神生活の衰退を意味するものである。ところが、その古典は、読書人口が減り続け、これまで研究者が培ってきた古典文学研究も、危機が懸念される状況が続いて久しい。そういう状況を受け、改訂された小・中学校の学習指導要領では、古典重視の方向が打ち出され、小学校国語科用教科書でも早くから古典を導入し、日本語の美しい響きに親しむことを求めている。そういう方向性が打ち出されても、現在の児童生徒が古典嫌いというのではお話にならない。私たち、国語教育に関わる者がそういう状況を見過ごしていいはずはない。そこで、私は、「古典を読むことが楽しくなる」方法として、古典和歌を絵画化し、それをもとにして話し合いをするという授業を提案してきた。

本稿は、その授業について、仮説と実践の形で論じたものである。

キーワード：今道友信氏、ローゼンブラット、新批評論、トランザクション、和歌学習

### 序 はじめに

日本古来の文学である古典は、読書人口が減り続け、これまで研究者が培ってきた古典文学研究も、危機が懸念される状況が続いて久しい。日本人の精神生活の根である古典が枯渇する

---

\*教授 国語科教育

## 松原一義

ことは、日本人の伝統的な精神生活の衰退を意味するものである。

そういう状況のもと、新学習指導要領<sup>(注1)</sup>では、日本の伝統的な貴重な文化遺産である古典に注目し、小学校でも早くから古典を導入し、日本語の美しい響きに親しむことを求めている。それを受けた小学校国語科用教科書<sup>(注2)</sup>でも、多くの出版社が古典教材を採用するようになってきた。また、十一月一日を「古典の日」にするという決定通知<sup>(注3)</sup>も、各方面に送られ、その記念行事も行われるようになってきた。

だが、そういう方向性が打ち出されても、現在の児童生徒が古典嫌いというのではお話にならない。私たち、国語教育に関わる者がそういう状況を見過ごしていいはずはない。そこで、私は、「古典を読むことが楽しくなる」方法として、古典和歌の絵画化を提案してきた。その提案と吉田新一郎氏が紹介するアメリカの国語教育の先人が考えた読書の理論、方法とを結びつけることによって、古典嫌いを克服する方向が見出せるのではないかと考えたからである。

### 一 読むことが楽しくなるために—今道友信氏の幼年期の読書体験—

日本の古典（古文）教育の主流は、訓詁注釈であり、ある権威者が考え出した解釈を生徒に教えるというのが授業であった。生徒は、その「権威ある解釈」には、たどり着けず、あるいはたどり着かずに終わるかもしれない。生徒が、何を考え、何を感じ、何を大切に思っており、何は拒否し、何がよく分からないのかといったことに関してはお構いなしで、そこに古典嫌いが生まれるのである。いわば、新批評論<sup>(注5)</sup>の立場に立つ教育である。

これに対して、吉田新一郎氏が紹介されたのは、「ルイーズ・ローゼンブラットの提唱」<sup>(注6)</sup>で、「reader response theory（読者反応論）」、「transactional theory（交流理論）」などと呼ばれる学説である。

ローゼンブラットの主張は、「作者が書いたテキストは、読者が読んで意味をつくり出すまでは紙に落ちているインクにすぎない」というものである。つまり、読者によって解釈され、意味がつくり出されて初めて作品になるというスタンスである。…中略…一人ひとりの解釈は違うわけですから、正解も存在しないことになります。<sup>(注7)</sup>

では、この考え方に対して、次の発言どうなるのか。

今道友信氏は、『美について』<sup>(注8)</sup>で、百人一首の「由良の門を渡る舟人舵をたえ、行方も知らぬ恋の道かな」の下の句を「行方も知らぬ鯉の道かな」と読み取っていた経験を語っておられる。

恥をさらすことになるが、自身の体験を例にとって説明しなければならない。

## なぜ和歌を絵画化するのか

「由良の門を渡る舟人舵をたえ、行方も知らぬ恋の道かな」という新古今集に収められている曾禰好忠の歌が百人一首の中にあることは大方の記憶されることであろう。いまでも、百人一首でカルタ取りをする遊びは行なわれているが、私が子供であった一昔前のころは、お正月に一族や友人が相集<sup>つど</sup>ってともに楽しむゲームといえはカルタ取りほど華やかなものはなかった。したがって私は子供のときからその遊びの一隅に加わろうとつとめたのであり、それは今日でも小さな子供が大人の仲間入りがしたくてこんにゃく玉と靴べらでゴルフのまねなどして遊ぶ様子と少しも変わりはない。五つか六つになったころ、ようやくルールにもなじみ、取り札の上の句五文字を覚えさえすれば、幾枚かは取ることができるといふことに気がつき、意味はわからぬままながら、とにかくもかなり多くの歌をいつの間にか暗記<sup>(注9)</sup>してしまった。

5、6歳で、これだけ百人一首をマスターするのは、驚異的であり、こういう方には、「古典嫌い」という言葉は不要であろう。さらに恐るべき理解力が示されている。

ところで、記憶した言葉について何らかのイメージを持たずにいることは人間として不可能な事のようなのである。私はなぜか知らないが、前掲の好忠の手になる「由良の門」の歌のリズムや語感に動かされて、この歌をどの歌よりも好んで取ろうと努力するうちに、この歌の意味を理解したいと思い、またしきりにこの歌のイメージを追った。由良の門とはなにか、と母に聞くとそれは港の名であるという答えがあり、舟人とは何かと言えばそれは船頭さんのこと、「舵をたえ」とは何かと問えば、舟の運転装置がこわれた状態であるということもわかってきた<sup>(注10)</sup>。

5、6歳で、「由良の門を」ここまで理解されては、国語教員も顔色が悪い。その子どもがこの歌に次のようなイメージを抱くのである。

しかし私は、「こい」という言葉をけっして人に聞かなかった。なぜならば、五歳の私にとってそれは人に尋ねる必要のないほど明白なことなのであった。当時、家には小さいながら池があって、そこには緋鯉が群れていた。幼ない子供に「こい」という発音は何のためらいもなく魚の鯉のことであった。「行方も知らぬ」という言葉ぐらゐは、お伽話<sup>とき</sup>を通じて知っていた表現であったから、私は淡水魚と海の魚との区別もない子供心で、青い海に面した広やかな港から漕ぎ出てゆく小舟があって、その舵がこわれたため、船頭はなすすべもなく、行方も知らず沖の方に流されてゆく、それを緋鯉が尾をひるがえしながら追ってゆくというイメージをいつの間にか思い描<sup>(注11)</sup>いた。

この経験を「恥をさらすことになるが」と語るところから考えると、今道氏は、この解釈を誤解と考えていたのである。だが、ローゼンブラットによれば、「正解はない」というのだ

## 松原一義

から、これは誤解ではないことになる。ローゼンブラットは、「より良い、ないしより悪い読み方はあっても、まちがった読み方はない」と言い切っているのである。

確かに、この読み方は、良い読み方とはいえないかもしれないが、今道氏は、この歌に、次のようなイメージを紡ぎ出している。

碧やかな海に漂流する舟を、真紅の鯉が飛ぶように泳いでゆくというこの奔放なイメージは、いま思い直してみると、シャガールの絵にあるような美しい像ではないか。私はある日その歌の真意を悟って愕然<sup>がくぜん</sup>となる日まで、このイメージを楽しんでいた。幾年かの間、私はこの歌によってかかる根もない幻想の美しさを味わっていたのである。<sup>(注12)</sup>

今道氏は、そのイメージについて、さらに言う。

ここにはしかし、何があったのか。軽快なリズム感、直接的に私の感覚を刺戟した美しい色彩のイメージ、また躍動する力動感、それから何かわからぬが、行方の知れないある種の不安感のようなもの、それと同時に浮かぶあてどない幼年の夢、これらは一体となって、一つの自己完結的な世界を構成していた。その幻影の色彩は私の孤独な子供の日々<sup>(注13)</sup>にひとつの救いであったこともたしかである。

この点も、ローゼンブラットの考え方によれば、次のようになる。

すべての子ども達をより良い読み手にすることを目標としたローゼンブラットは、文学は読み手のために書かれたものであり、研究者のために書かれたものではない、と考えていました。また、文学に浸るという体験を子ども達から取り去ってしまうことにも危惧<sup>(注14)</sup>していました。

今道氏は、奇しくも「文学に浸るという体験」をしていたのであり、きわめて面白い読書経験をしていたことになるのである。「子ども達の学びを大切に」というローゼンブラットの考え方から言えば、今道氏は、百人一首の解釈を誰から押しつけられるということもなく、主体的に学ぶことができる教育環境にいたことになる。ローゼンブラットのテキストに対するアプローチの仕方は、「テキスト（書き手）と読み手のトランザクション（やり取り）を大切に」というものであったからである。

吉田氏は、その点を、次のように説明する。

子ども達の学びを大切にすることとは、「読者」としての子どもを、彼（女）達<sup>(注15)</sup>がもっている興味・関心、様々なことに対する思いやこだわり、責任や物事の良し悪しの判断なども踏まえている存在として捉えることを意味します。

今道氏も、大人になって、自分の幼年時の百人一首の解釈について、さらに次のように言う。

しかし何がそこに欠けていたのか。この子供の夢の間違ひは「恋」という言葉を知らず、

## なぜ和歌を絵画化するのか

その上にまた、「恋」を「鯉」と誤解したことにある。そして、この無知と誤解によって、いかに美しいイメージを私が持ち、それによって、いかに私がひそかに慰めを感じていたとしても、芸術鑑賞としては、このような事態は明らかに誤りであると言わなければなるまい。<sup>(注16)</sup>

今道氏が誤解と判断したことには、「芸術鑑賞としては」という限定が付されている。その上で、学者としての今道氏は、芸術鑑賞について、「理性がはじめて真実の美を発見する」と言って、次のように言及する。

どのような作品の場合にも、理性的に理解するという段階がなければ、その作品の鑑賞は成立しない。美はこの意味で、たしかに理性的に発見されなければならない面がある。作品をその真実の姿において体験するためには、そこに使われている一語をもゆるがせにしない理性的な考察が必要だということは、この簡単な事例からも承認せざるをえないであろう。しかし、ひとは次のように言うかもしれない。いま述べたことが妥当するのは、詩という明確に意味を指示する言語芸術だからであろう、一般の芸術については、必ずしも理性的に考えるということなど不必要ではなからうか、と。しかし、はたしてそうであらうか。<sup>(注17)</sup>

「恋」を「鯉」と取り違えたことは、幼年故の未知が生み出した解釈である。だが、これを誤解というのなら、「由良の門」はどこかの港と理解していたのか。『万葉集』『八代集歌枕』『八雲御抄』では、紀伊国の歌枕としているのに、『散木奇歌集』では、丹後国と見なし、淡路島には、津名郡由良町の地名があり、その海峡が「由良瀬戸」と呼ばれている。歌の解釈には、年齢を重ねても未知の部分が残るのが常であろう。

とは言え、今道氏が言う「一語をもゆるがせにしない理性的な考察」という点は、認めざるを得ないであろう。

## 二 授業実践の様々—古典の絵画化—

先日、私のゼミナール所属の学生が、小学校において、和歌（短歌）の指導授業をさせていただくことがあり、それを見学した。学生は試行錯誤をしながら、次第に授業の進め方を身につけてきたように思われた。その授業は、小学校4年生対象で、「東の野にかぎろひのたつ見えて かへりみすれば月かたぶきぬ」（万葉集、柿本人麿）を用いてのもので、音読指導をし、その歌の実景を想像し、絵画化をしようというものであった。

学生は、「歌の中で東の風景と西の風景はどのようにになっているか」と発問した。すると、

多くの児童が、東の空に月があると答えた。誰もそれに反対するものはなかった。与謝蕪村の俳句に「葉の花や月は東に日は西に」とあり、これだと太陽は、「夕陽」であろう。だが、学生は、辛抱強く、自分から答えは出そうとはしなかった。ただ「本当にそうだろうか」と疑問を投げかけた。周辺を埋めながら、落ち着き払っていた。やがて児童が気付くことを知っていたのであろうか。「かぎろひ」の写真を見せ、「かたぶく月」を想像させ、「かへりみすれば」のところで、どちらの方角へ振り返って見たのかというところになり、「かぎろひ」の意味を確認した。「あっ！」と児童のひとりが言った。「これは夕陽ではなく、朝日だ！」と。そこで、どよめきが起こった。

「分かりやすい授業をありがとう」と指導の先生から言われたのは、学生の授業に進歩のあとがあったということであろう。学生自身も、児童が絵画化した資料をデジタルカメラに写し、その授業についてのアンケートを持って帰ってきた。すぐそれらを整理していた。これは、ローゼンブラット流の授業実践と言えようか。

以下、新後拾遺和歌集の絵画化について述べる。

## 1 新後拾遺和歌集の絵画化—「日本語と表現」の授業—

通釈までの手順は、先の報告で述べた通りであるが、<sup>(注18)</sup>一般論として言えば、小学生から中学生、中学生から高校生になるにつれて、生徒自身が調査する範囲が広がることになる。平成24年後期「日本語と表現」(2)の第3回授業で、「紅葉」の歌を取り上げることがあった。

まず提示したのは、次の資料である。

(本文)	伏見院に三十首歌たてまつりける時、山紅葉を 津守国冬 451 紅葉ばもたがみそぎとて竜田山 秋風ふけばぬさとちるらむ
(通釈)	伏見院に三十首歌を献上した時に、「山紅葉」を 津守国冬 451
(語釈)	○たがみそぎとて＝「みそぎ」とは、身に罪やけがれがあるとき、また、神事などの前に、川原に出て水で身を清めること。「みそぎ川」は名越の神事に川岸に「ぬさ」を立てて祭を行う川。誰のみそぎをするというので。 ○竜田山＝441の語釈参照。 ○ぬさとちるらむ＝「ぬさ」は神に祈るときの捧げ物。また祓えに出すもの。まるで幣 <small>ぬさ</small> のように散るの であろう。

続いて提示した通釈は、次のようなものである。

誰が禊みそぎをするというので、龍田山では秋風が吹くと、紅葉の葉が幣ぬさのように散るの  
うか。

## なぜ和歌を絵画化するのか

これに対する絵画化は、図1・図2である。同じ歌でイメージされた絵画が、「散る紅葉」では一致しているが、描き方に大きな隔たりがあるのである。

また、別の年度の学期末の課題に1首を選んで、絵画化してもらおうと、「年ごとにそむる心のしるしあらば いかなる色に花のさかまし」(91)の桜の花を詠んだ歌については、図3・図4のような絵が描かれた。「桜の花」も、新後拾遺和歌集中の配列を無視すると、必ずしも桜の花としては描かれないのである。前者は、「きっと意味は違うと思うのですが、自分流にアレンジしてみました。」という。後者は、「花が咲いていないと印象にない木なのかと思いました。とてもきれいな色に咲くわけでもないだろうが、どのように咲くのか楽しみにされているような感じに思われて選びました。」という。詞書は無視してもよいという約束で読んだので、このようになったのだろうか。

また、「色も香もなつかしきかなかはらずなく るでのわたりの山吹の花」(145)は、図5のような描き方をしている。その鑑賞文では、次のように述べる。

この和歌を読んでいると、様々な風景がイメージできます。ある小さな湖(?)で少女が座っていて、傍らにある山吹の鮮やかに咲いた様子、その花の色や香に心惹かれる少女、その少女の傍らに静かにただのんびりしているかえる……そんな風景が頭に浮かびます。

山吹の花言葉「気品・崇高・待ちかねる」などの意味、私は好きです。ただ明るく豪華なのでもなく、その中に上品な所があるのが特に。余談ですが、山の中に咲き、花の色が露に似て金色で美しいことや、しなやかな枝が風に揺れる様子から「山振」の字があてられ、後に「山吹」となった……という説があるそうです。

そんな魅力的な山吹の花、この和歌は活かせていると思いました。<sup>(注19)</sup>

人物を登場させるのは、鑑賞者の独創である。同じ歌を鑑賞しながら、自然描写に専念しているケースもある。素材としては、井手のあたりの山吹、カエルであるが、山吹自体がしなやかな枝に咲くものと群生しているものと描かれている。また、後者では、井堰をも描き加えている。ともに美しい景気が描出されている。

歌のイメージを忠実に追求したものに、「しほかぜにあら磯波のいくかへりくだけでも又岩にかくらん」(1284)の図6の絵がある。その鑑賞文は、次のようなものである。

まず、純粋に風景を詠んだ歌として鑑賞すると、海上を吹く風が静かに、しかし力強く寄せてはくんだり、また引いては寄せる様子がとても威風堂々としていて、自然の強大さを見せつけられるとともに、くだけた瞬間に散る飛沫がそれはそれは繊細な美しさ、日本人が古来から愛する刹那の美があらわれている。その相反する波の様子を目で耳で肌で感じている作者の立場に立ったような気持ちで、躍動的な波の様子を絵にあらわした。

## 松原 一 義

さらにこの波を誰か人物を詠んだものとして鑑賞すると、何度うち砕かれようと、絶えず困難に立ち向かっていく勇ましい人物を彷彿とさせられる。<sup>(注20)</sup>……以下略……

また、「故郷をたちし日数はつもれども 猶末とほき旅ごろもかな」(867)の歌は、図7、「あかずみる心をしらばさくら花 なれよいく世の春もかはらで」(92)の歌は、図8のように絵画化されている。それぞれ絵画化の表現方法に工夫が見られる。

この他、児童教育学科において、「百人一首の絵画化」という課題を課したこともあり、様々な着想の絵画化があったが、それについては、紙面を改めたい。

### 2 絵画化された絵の本当らしさ

先の絵画化では、細部までイメージを鮮明に描くことで内容に深く入り込むことができる。それによって理解も深まり、描かれた絵もそれらしくなるのである。だが、それらしくなったと言っても、それが唯一の正解というわけではない。読み手はそれぞれの経験や知識を総動員して歌を読むのだから、それぞれの読み手のそれらしい絵があるというわけである。

他方、イメージが描けない時は、読み手が理解できていないのではないかということにもなる。そして、その場合は、歌の言葉やその使われ方を再吟味する必要がある。だから、感想で、「想像するのが難しかった」とある場合は、歌の読みの修正モードに入る必要があるということである。

大浦康介氏は、<sup>(注21)</sup>“虚構の知恵・「ウソ」の効用”の中で、次のようにいう。

画家の安野光雅が、数年前、NHK教育テレビの「人間講座」で面白い試みをしていた。「絵とイメージネーション」と題された連続授業で、安野は生徒たち（たしか中学生だったと思う）に想像上の島のアウトラインや、想像上の山の稜線<sup>りょうせん</sup>を描くよう求めたのである。安野は自分が『ABCの本』で描いたスティーヴンソンの宝島の地図を例として示していたが、これが描こうとすると案外むずかしい。想像上だからどんなふうにも描いてもいいと思いがちだが、けっしてそんなことはない。やはり「それらしく」描かなければならないのである。フィクション論でいう「本当らしさ」が求められるのだ。<sup>(注22)</sup>

和歌の絵の本当らしさも同様である。和歌の読み手は、歌が示す現地を、目指す宝島を、言葉や自己の経験や知識を総動員して発見しなければならないのである。

大浦康介氏は、さらに言う。

そこで気づかされるのが、安野が言うには「本当の島のアウトラインはでたらめのようにいて、すべて自然の摂理にかなっている」ということ、「自然の形には意味がある」ということである。これを私の立場から言い換えれば、フィクションもまた、「本当らしく」

なぜ和歌を絵画化するのか

図一覽



図1 日本文化学科 沢藤 亜由美



図2 日本文化学科 狩野 葉月



図3 幼児教育学科 菅井 葉



図4 生活文化学科 阿部 麻弥



図5 幼児教育学科 川村 真理子



図6 幼児教育学科 大久保 彩香



図7 日本文化学科 古田島 美紀



図8 生活文化学科 秋山 奈津子

## 松原 一 義

あろうとするなら、この「摂理」を体現するものでなければならないということになる。すぐれたフィクションは、この「摂理」をいわば純粋な形で（「ノイズ」なしに）宿している<sup>(注23)</sup>のである。

先の図1・2の絵が異なるのにも意味がある。「紅葉ばも」の歌と読み手とのトランザクションの結果が絵になったのであり、そこには読み手なりの歌のイメージ化が確立しているのである。歌がすぐれているかどうかはさておき、他の絵画化されたものも同様の過程を経ている。歌には意味があり、それを掘り起こして、自分なりの解釈をして、いかにも「本当らしく」図1から図8までの絵に定着させているのである。

大浦康介氏は、さらに言う。

このことは『詩学』の別の一節を思い起こさせる。アリストテレスはそこで、フィクションの基盤となるミメシス（物事の模倣ないし再現）について、絵画を例にとって次のように述べている。「人が絵を見て感じるよろこびは、絵を見ると同時に、「これはかのものである」というふうに、描かれている個々のものが何であるかを学んだり、推論したりすることから生じる」（松本仁助・岡道男訳、岩波文庫）。虚構の知恵の根底には、こうした模倣やシミュレーション<sup>(注24)</sup>がもたらす「学び」と「よろこび」があるのである。

私たち和歌の学習者が和歌の絵画化をして感じるよろこびにも、同様のものがある。すなわち、和歌の世界をイメージして、それを絵画化した時、「これはまさにその和歌の世界そのものである」と感じたり、推論したりできることがよろこびなのである。それは、模倣でありながら、創造にも通じるものであり、その時、私たちはその和歌の中に潜む宝物を発掘したような体験をすることになるのである。

### 三 小学校における解釈・理解力がつく和歌指導

小学校の和歌（短歌）指導においては、従来は、音読・朗読指導を推進する向きが多かった。それは、小学校の旧学習指導要領において、古典教材はほとんど取りあげられることはなく、5・6年用の教科書において、わずかに取りあげられるだけであったからであろう。だが、新学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において、伝統的な文化の重視があげられ、それを受けた古典教材が3・4年生用の教科書にまで採択されるようになった。

さて、このような状況の変化を踏まえると、その音読・朗読指導だけで、小学校における古典指導上の問題を解決するのはむづかしいと考えられることになる。

まず、教科書でも、古典教材の扱いには配慮をし、注記を付し、口語訳を付けるなど、児童

## なぜ和歌を絵画化するのか

生徒の理解を助ける方途を廻らしている。古典の原文を与え、音読・朗読指導を推進すれば、それでよいとは考えてはいないのである。

では、注記を付し、口語訳を付ければ、その問題は片付くのであろうか。確かに、児童が短歌世界に対する語義的理解をすることはできるであろうが、それだけではやはり不十分であろう。

小学校における短歌指導においては、その言語と認識の関係を確認することが必要で、そのための指導法の模索が必要になる。

その一例として、私は短歌世界の絵画化ということを提案したわけである。まず児童は、先の音読・朗読までの学習過程で、自分がその短歌について抱いたイメージを絵画化する。その絵画化したものを教員がスキャナーで画像として取り込み、児童に紙資料として提供する。それにより、児童は自己が絵画化したものと他者が絵画化したものとを比較し、その共通点と相違点に注目する。児童は、共通点より、むしろ同じ対象を絵画化しながら、その相違点の大きさに驚くであろう。

そこで、話し合いが必要になるのである。いい読みをするには、一人では自ずと限界がある。お互いの相違点を出発点にして話し合うことで、読みが深まり、歌の世界を自分のものにすることができる。話したり、聞いたり、考えたりすることで、私たちの解釈・理解力がついてくるのである。

その点、新学習指導要領では、“B「書くこと」の(1)書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する”の項目に、次のような旧学習指導要領にない項目が追加されている。

1・2年のオ「書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと」

3・4年のカ「書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと」

5・6年のオ「本や文章を読んで考えたことを発表し合い」カ「目的に応じて、複数の本や文章を選んで比べて読むこと」<sup>(注25)</sup>

話し合い、伝え合うことにおいては同じだが、学年段階において、指導の仕方に変化が見られるのであり、そういう配慮がされている点、新学習指導要領の見識がうかがわれるのである。つまり、理解を深めるために、学年段階を追って、新たな指導の視点を儲ける必要があるのであり、その指導法として、和歌の絵画化とそれをめぐっての話し合いを提唱するのである。

## 松 原 一 義

### 結 おわりに

百人一首（曾禰好忠作）の「由良の門を」の歌は、5, 6歳時の今道友信氏によって、シャガールの絵のような美しいイメージを与えられた。しかも、その幻影の色彩が、今道氏の「孤独な子供の日にひとつの救いであった」と言う。その今道氏が、大人になって、「由良の門を」の歌の「鯉」は「恋」のことだと気付き、幼い日の解釈について、「このような事態は明らかに誤りであると言わなければなるまい」と言う。「理性がはじめて真実の美を発見する」と考えるからである。

にもかかわらず、ローゼンブラットは、「著者ですら意味をつくり出す体験をする」と言い、次のように述べている。

時期を変えてある作品（本）を読むと、解釈や理解が異なるということも多くの人達が体験している。その時々にもっている知識や体験（気分など）の総体が違うため、同じものを読んでも違うもののように読めてしまう。それは、作者自身にも言えることである。

ローゼンブラットにとっては、「由良の門を」の歌の解釈の変化は、今道氏が時期を変えて読んだ結果ということになる。今道氏の言語体験の結果が、その解釈の結果を導いたということになるのである。

国語教育に携わる者はローゼンブラットの考え方に目を向けることが必要ではないかと考える。古典嫌いの学習者を生み出さないためにも。

### 注

- (1) 『小学校学習指導要領』平成20年3月告示、平成22年10月8日第五版、文部科学省、東京書籍発行
- (2) 教育出版・東京書籍・三省堂・光村出版・学校図書より出版されている。
- (3) 「古典の日に関する法律の施行について（通知）」24庁房第168号、平成24年9月5日、文部科学副大臣 高井美穂、担当 文化庁長官官房政策課企画係
- (4) 吉田新一郎『「読む力」はこうしてつける』2010年11月30日、新評論
- (5) 同(4) 40p.6-13。new criticism のこと。意味はすでにテキストの中にあり、それを引き出すのが読者の役割だとする考え方。
- (6) 同(4) 39p. 脚注。Louise M. Rosenblatt のこと。2005年に100歳で亡くなった。長年ニューヨーク大学で教授を務め、「読み」の分野で大きな貢献をした。
- (7) 同(4) 39p. の①による。
- (8) 1973年6月第一刷、1991年11月、第二八刷、講談社現代新書
- (9) 同(8) 今道友信『美について』1991年11月、第二八刷、講談社現代新書 pp.25-26
- (10) 同(9) 26p.9-15

## なぜ和歌を絵画化するのか

- (11) 同(9) pp.26-27
- (12) 同(9) 27p.6-9
- (13) 同(9) 27p.11-15
- (14) 同(4) 40p.19-22
- (15) 同(4) 40p.23-26
- (16) 同(9) 27p.15-28p.3
- (17) 同(9) 28p.4-10
- (18) 川村学園女子大学大学院人文学研究科教育学専攻初等教育学領域教員養成研究会編『小学校教員養成における「コミュニケーション能力」を高める教科教育法に関する研究』2001年9月25日
- (19) 幼児教育学科 川村真理子氏の鑑賞文。
- (20) 幼児教育学科 大久保彩香氏の鑑賞文。
- (21) 『世界思想』2011年春, 38号, 世界思想社
- (22) 同(21) 2p. 上段 16- 下段 2
- (23) 同(21) 2p. 下段 3-10
- (24) 同(21) 2p. 下段 11-19
- (25) 日本教材システム編集部『小学校学習指導要領 新旧対照表』2008年4月20日第1刷, 2008年5月8日初版第3刷, 教育出版

**後記** 本稿をまとめるに際し, 今道友信氏の『美について』の御論考に多大の示唆を受けました。また, 我孫子第三小学校の山宮文昭校長と同小学校の先生方にもお世話になりました。さらに本学のゼミナール所属の学生, 「日本語と表現」, 「文学」の受講生にも協力をいただきました。その他, 多くの方々にお世話になりました。ここに記して, 深甚の謝意を表します。